10 私たちも何かしたい。私たちに何ができるだろうか？

～中高自治会活動を中心としたユニセフ募金の取り組み～

報告者　大阪府樟蔭中学校高等学校自治会指導部長　細野　昌彦先生

1、学校・生徒の紹介

本校は、幼稚園・中学校・高等学校・大学と併設する私立の女子校です。その中で、中学校は３～４クラス・高等学校は７～９クラスで、中学から高校へは大多数が進学します。私の担当は中高自治会指導部で、その活動の一環としてユニセフへの募金活動を毎年行っています。しかしユニセフ募金だけ取り組んでいるのではなく、さまざまな取り組みがあります。またそれらが独立してあるのではなく、中学校で行われている人権教育部によるユニセフの学習などが下地になっています。今回、これらも含めて報告します。

2、高校自治会の取り組む福祉活動

樟蔭高校自治会では、毎年福祉活動に取り組んでいます。今年度は、ユニセフ募金、東日本大震災募金、エコキャップ運動、口と足で描く作品販売、最寄り駅周辺の清掃活動です。これはその年によって少しずつ変わるのですが、ユニセフ募金の活動は1999（H11）年から継続して取り組んでいます。

毎年、５月に行われる自治会春季総会で、自治会執行部の生徒から提案があり、取り組みが承認されます。

今年度の総会では、ユニセフ募金について以下のように提案しました。

今日は皆さんに５つの大切なお話をします。しっかり聞いてください。

世界中では年間約810万人の子供たちが死に追いやられています。その大部分ではアジア・アフリカなど発展途上国で発生しており、原因は飢え・病気・戦闘の犠牲などです。これがどのくらいの数字かというと、約４秒に一人が５歳未満で命を失っているという現状です。日本に住む私たちにとっては、想像もつきませんよね。しかし、遠く離れた困っている人々を私たちが身近に助ける方法があるんです。

その一つはユニセフです。毎年樟蔭ではユニセフ募金を行っています。皆さんは募金したお金が具体的にどのように使われているかご存知ですか？食料や物資などをそのまま提供する活動は実はそれほど多くなく、実際には将来現地の人々が自分達の力で子供たちを健康に育てていけるようにする“自立のための支援”にお金が使われています。

日本では予防できるような病気にかかって死んでしまう人たち、差別や暴力のために毎日恐怖と隣り合わせで生活している人たち。平和な日本で暮らしている私たちの生活とはとてもかけ離れていますが、今この瞬間にもこれは現実として起こっているのです。どうか１円でもいいので募金をしてください。一人でも多くの方々を救うには皆さんの力が必要です。（以下略）

このような呼びかけに生徒たちも応えてくれて、これらの福祉活動へ協力が集まります。昨年度末から今年度にかけては、現在緊急なものとして「東日本大震災募金」に集中して取り組んできました。今後は例年通りに、１学期末にユニセフ募金に取り組む予定です。

３、人権学習の一環としての取り組み

このような福祉活動、特にユニセフ募金も自然に取り組まれているわけではありません。人権教育部がさまざまなＨＲ等を使った人権教育を進めています。その中で、中学校における「ユニセフの学習」が大きな力を発揮しています。ほぼ毎年、ユニセフに関連する内容の学習を行いますし、それによって世界の貧困・飢餓・内戦・災害・・・といったことへの初歩的な知識が身につきます。

また、中学自治会もユニセフ募金に取り組むようになっています。その生徒達が、進学した樟蔭高校生の約半数を占めているわけです。

昨年度は、２月に「ユニセフと地球のともだち」「この世界に生きる子どもたち」のビデオを視聴して、資料を読み、感想文を書いています。以下はその一部です。

・私は学校に通えてご飯も食べているのが普通だと思っていました。しかし、世界には何も食べられなくて、勉強ができない子どもたちがたくさんいるので「すごくすごく私は幸せだな。」と思いました。１日で子どもが２万2000人死亡、４秒に１人が死亡だなんて考えるだけで恐ろしいです。以前、私の小学校では、ユニセフ募金というのがありました。私は、100円とか50円だけしか入れませんでしたが、100円でも「経口補水塩16袋」を提供できることを知ったので、私は、こんな100円でも人の命を守れることを知ったのでうれしかったです。（１年生）

・私は今まで、こんなにもたくさんの人がきれいな水を飲めていないなんて知りませんでした。私たちは蛇口をひねるとすぐにきれいな水が出るのに何時間もかけて水を汲みに行くのは大変だと思うし、そのせいで学校に行けなくなるのもかわいそうだと思った。

地震や津波のため家族や友達をなくして、とてもかわいそうだと思った。お父さんやお母さんに育ててもらっているのに、いなくなったらどうしていいのか分からない。子どもなのに、突然知らないところに連れていかれて兵士にさせられたり、目の前で親を殺されて兵士にさせられて、そのせいで命を落とした子どももたくさんいると思う。兵士から抜け出て、リハビリを受けた後、自分の村に戻される。戻されてもそこには家族がもういないが、どうするのだろうと思った。私は今、自分がとても幸せだと思った。　（１年生）

・このビデオで、悲しい現実を受け入れなければならなかった。栄養・水と衛生・教育・・・。そんなことを一度も考えたこともなく、無知な自分をとても腹立たしく思った。生きることに必死なんて考えられなく、実際に体験しないとわからないことがたくさんある中で、一つでも、多くのことを知って、助けなければと思った。それと同時に、こんなに豊かな国でも虐待・いじめなどの身体・精神、（この問題とはまた違うケアが必要という）新しい問題が私の中で出てきた。　（２年生）

・ビデオの中で一番多かったのは「学校」という言葉でした。私たちはあたり前のように学校に通っているけれど、世界中には学校に行けない子や教材が足りない子がいっぱいいるから、学校を作ったりするユニセフは役立つんだと思います。それに子供なのに兵士にされるなんてありえないです。戦争をしていてもいいことは何一つないし、人を殺すのは誰にだって簡単にできることじゃありません。それを子どもにさせるなんて想像するだけで恐ろしいです。日本も昔戦争をしたし、女性の差別とかもあったけど、ユニセフの助けを借りて豊かな国になりました。次は日本が人々を助ける番だと思います。　（２年生）

・私たちの生活からこのような状況は想像できない。だからビデオで見るのはとても良いことだと思う。人間や生き物の体はほぼ水なのに、その水がないのは致命的だと思う。何をするにも命があってこそなのに。危険な仕事、重労働をしたりする子、子ども兵士。など、日本では考えつかないことが他の国では日常となっている。駄目だと思う。勉強したいと思っていてもできないのは子どもから夢や希望を奪っていることだ。学校も少なく、遠かったりするのでユニセフの援助は大切だと思った。世界では全人口の２倍の人が食べていける食糧があるのに片寄りすぎていると思う。お金に余裕がある人はどんどん募金するべきだ。そして現状を知らない人に広めるべきだ。　（３年生）

以上のように、生徒たちは学習し、感じ、考えていきます。これらがその後のユニセフ募金をはじめとする活動の基礎になっています。

4、これからの活動にむけて

３．１１の東日本大震災とその後の福島第１原発事故は、とても大きな被害を与え続けています。震災直後から、在校生や卒業式を終えたばかりの卒業生の中で、「私たちも何かしたい。私たちに何ができるだろうか？」という声が自然におこってきました。

今までもユニセフの活動を学習してきていますが、今回のことで「どこか遠い国での話だけではなく、身近なところでも手助けを求めている人々がいる」ということが、生徒ひとりひとりに実感されているのだと思います。

私たちは、「日本国内にも、世界にもさまざまな困難をかかえ、手助けを必要としている人々がいる。」「私たちも何かしたい。私たちに何ができるだろうか？」という生徒の感覚を大切にしつつ、今後も広く取り組みを進めていきたいと考えています。

一方で、今生徒達は２学期に行われる「若葉祭（文化祭や体育祭などの取り組み）」の準備に取りかかっています。中高自治会執行部の生徒が原案をつくった「若葉祭テーマ」の訴え文の中にはこんな一節があります。

「今、東日本は震災で大変な被害を受けています。私達も募金活動に取り組んできました。こうやって東日本を応援することも大切ですが、今の私達にできる事は西日本から笑顔を広げて日本を盛り上げていくことだと思います。私たちの今の普段の日常に感謝して、若葉祭を笑顔で楽しみましょう。」

このような、日々の暮らしに感謝し、毎日の学校生活を充実したものにしていこうという感覚も、大切に育てていきたいと考えています。